

マルカム2世によるスコットランド王国の領土拡大

The Scottish Territorial Expansion by Malcolm II

川 瀬 進

分野：経済史：スコットランド経済史 332.332

キーワード：ダル＝リアダ王国、聖コロンバ、ストーン＝オヴ＝スクーン、アルパ王国、モニーマスクの聖遺骨箱、タニストリー＝システム、ブルナブルフの戦い、ヒベルニア、ガフォール（Gafol：デイン人への退去料）、デインゲルド（Danegeld：デイン人への退去料）、セント＝プライスの日、アシンドン（The Battle of Ashingdon：アッサンダンの戦いthe Battle of Assandune）、カーハムの戦い、デインロー（Danelaw：デイン人の法律が支配した居住地）

目次

I はじめに

II アルピン王家

III 王位継承

IV 領土拡大

V おわりに

I . はじめに

ヒベルニア（HIBERNIA ラテン語でアルピオンより西方の島国、古代アイルランド語でエイリン（Eirinn 西）の国、ゲール語でエール（Eire）の国：現アイルランド）の北東部アルスター（Ulster）出身で、スコット族（the Scotts）であり、ダル＝リアダ王（King of Dál Riada）であるファergus＝モー＝マックエルク（Fergus Mor MacErk, 430.6.29-501.10.12：ダル＝リアダ王在位490-501）が、新天地を求め、海を渡り、498年に、カレドニア（CALEDONIA：緑樹林の地：現スコットランド）のキンタイア半島（Kintyre）に到着した。そして、そのキンタイア半島を拠点に、スコット族が定住し始めた。

スコット族が定住し始めたキンタイア半島およびカレドニアでは、すでに、

ピクト族 (the Picts) を改宗させるために、ローマ法王より送り込まれた司教ニニアン (後の聖ニニアン Saint Ninian : Nynia, c. 360-c. 432) が、397年頃、ウィットーン (Whithorn) の地で、キリスト教の布教活動を行っていた¹⁾。

だが、司教ニニアンのキリスト教布教活動は、功を奏さなかった²⁾。

その布教活動が行われていたキンタイア半島にて、ダル＝リアダ王ファーガス＝モー＝マックエルクの3人の息子によって、積極的に定住が行われた³⁾。

すなわち、セネル＝ロアーン (Cenél Loairn) がカレドニアの西部、セネル＝オエングス (Cenél Oengus) がアイレー (Islay) 島、セネル＝カブライン (Cenél Gabráin) がキンタイア半島に、定住していったのである⁴⁾。

このファーガス＝モー＝マックエルクが、498年、アーガイル (Argyll) のキンタイア半島を拠点に、スコット族 (the Scots) のダル＝リアダ王国を建設した時、カレドニアでは、その後、北東部にピクト族 (the Picts) のアルバ (Alba) 王国、南西部にブリトン族 (the Britons) のストラスクライド (Strathclyde) 王国、南東部にアングル族 (the Angles) のノーザンブリア (Northumbria) 王国の4つ王国が存在することとなった⁵⁾。

スコット族の小さなダル＝リアダ王国 (Kingdom of Dál Riada : Dalriada) の王アルピン (Alpin, d. 834) が、ピクト族によって殺害されたのち、そのダル＝リアダ王国を継承したのは、母 (Sister of Constantine King of the Picts) がピクト王の血を引く息子のケニス＝マッカルピン (Kenneth, MacAlpin, 810-858.2.13 : ダル＝リアダ王在位834-858) であった。

1) A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland : The Making of the Kingdom, Reprinted of 1975, edition, Oliver & Boyd, 1975, p. 37.

2) Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, Reprinted of 1903, edition, AMS Press, 1970, p. 11.

3) James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History Story of a Nation*, Reprinted of 2002, edition, Lomond Books, 2014, p. 60.

4) · A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 42.
· Mike Ashley, *A Brief History of British Kings & Queens*, Reprinted of 1998, edition, Running Press Books Publishers, 2002, p. 98.

5) スコット族がキンタイア半島を拠点に定住し始めると、すでにそこに住んでいたピクト族を、カレドニアの北部、西部に追いやった。また、強力な王権を持つスコット族の定住は、南部に国境を接するブリトン族のストラスクライド王国に、脅威を与えることになった。

キリスト教徒であったケニス＝マッカルピンは、ダル＝リアダ王国の継承後、またアルバ王（the King of Alba）としての戴冠後、自国の存続と拡大を、考えなければならなかった。

だが、アルバ王国の王ケニス1世＝マッカルピン（Kenneth I, MacAlpin, 810-858.2.13:アルバ王在位843-858）は、道半ばにして、858年、パース（Perth）近郊の盆地アーン＝バリー（the Earn valley）で、がん：悪性腫瘍（cancer）に蝕まれ亡くなった⁶⁾。

ケニス1世＝マッカルピンの意志を受け継いだのは、アルピン王家（the Alpin）の最後の後継者、マルカム2世（Malcolm II, c. 954-1034.11.25：在位1005.3.25-1034）であった。

マルカム2世が、アルピン王家を継承するまで、アルピン王家では、政治的、経済的、軍事的、不安定で、しかも親族内のゴタゴタ続きで、長期的で有能な統治者が現れなかった。

そこで本稿では、マルカム2世が、アルバ王国の王位をどのようにして継承できたかを、アルバ王国の時系列を辿りながら、またマルカム2世が、アルバ国内で自身の権力拡大と、領土の拡大をどのような政策でもって行ったかを、隣国イングランドと王国と関係付けながら、考察する。

Ⅱ．アルピン王家

ピクト王の血を引きキリスト教徒でもある、小さなダル＝リアダ王国の王ケニス＝マッカルピンは、王位就任後、対内的・対外的なリスクを少しでも避けるために、早急に自身の権力安定と、領土拡大を、目指さなければならなかった。

対内的とは、ケニス＝マッカルピン自身のスコット族と、隣国で強大な王権を有している大国のピクト族のアルバ王国と融合することであった。

以前、ケニス＝マッカルピンの父アルピン（Alpin, d. 834）が、敵対関係

6) ・ James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History Story of a Nation, op. cit.*, p. 70.
・ Chris Tabraham, *The History of Scotland*, Reprinted of 2010, edition, Colin Baxter, 2016, p. 14.

であったピクト族によって殺害されていた。

だが、父アルピンが殺害された後、ケニス＝マッカルピンは、大国のピクト族との婚姻、交易、文化、キリスト教に力を注ぎ、両王国の和平、融合を可能にさせた。

また、対外的とは、8世頃から本格的に始まった異教徒のヴァイキング (the Viking) の奇襲、来襲、植民に対応することであった。

特に、ノルウェーのヴァイキング、ノース人 (the Nórse) は、オークニー諸島 (Orkney Islands)、シェトランド諸島 (Shetland Islands)、ヘブリディーズ諸島 (Hebrides) へ、襲撃、略奪、植民に遣って来ていた。

このような要因を考えると、必然的に、ケニス＝マッカルピンは、自身のスコット族、ダル＝リアダ王国と、隣国の北スペインのバスク人のDNAを保有するピクト族⁷⁾ のアルバ王国 (The Kingdom of Alba)⁸⁾ とを、平和的・友好的に融合させ、そして一致団結して、ノルウェーのヴァイキング、ノース人に対処しなければならなかったのである。

7) このピクト族の人びとが、アルバ王国民、スコットランド人になっていった。

・Cristian Capelli, Nicola Redhead, Julia K. Abernethy, Fiona Gratrix, James F. Wilson, Torolf Moen, Tor Hervig, Martin Richards, Michael P. H. Stumpf, Peter A. Underhill, Paul Bradshaw, Alom Shaha, Mark G. Thomas, Neal Bradman and David B. Goldstein, "A Y Chromosome Census of the British Isles," *Current Biology*, Vol. 13, Issue 11 (27 May 2003) , p. 981.

8) ・アルバ (Alba) という言葉は、ゲール語 (Gael) であり、スコットランドを意味する言葉である。

・このアルバという言葉は、愛国心の強いスコットランド人たちによって、現在でもよく使われている。イングランドからスコットランドに入るとき、主要国道の案内板で、このアルバという言葉が、垣間見ることができる。具体的には、ノーサンバーランド国立公園 (Northumberland National Park) 内を横切る主要国道A68が、その公園を出た北側の丘陵とところに、カーター＝バー (CARTER BAR) という地点のところである。

・このカーター＝バーは、スコットランドとイングランドとの国境地点であり、イングランド側から車で、カーター＝バーの側道に入ると、東側にSCOTLANDという文字が入った大きな1枚岩がある。西側にはFàilta gu Alba : Welcome to Scotlandという文字が入った道路標識がある。このカーター＝バーには、何度か学生とゼミ研修 (川瀬ゼミ) で、来たことがあるが、いつも強風で、時にはシャワー状の強風、そしてスコティッシュミスト (Scottish Mist) で、びしょ濡れになりながら、強風で、寒くて、暗いスコットランドの風土に、肌で触れることができていた。

・なお、スコットランド側からカーター＝バーの側道に入ると、西側にENGLANDという文字が入った大きな1枚岩があるが、ゲール語で書かれた道路標識はない。

すなわち、この一致団結を実現させるためには、当然、ケニス=マッカルピンは、スコット族とピクト族とが融合したダル=リアダ=アルバ連合王国 (The United Kingdom of Alba) の王に就任し、軍事力を強化しなければならなかったのである。

その連合王国の王に就くためには、ケニス=マッカルピンは、屋外で人民の前で、ダル=リアダ王国で伝統的に行われていた大理石 (Mable)⁹⁾ の石の上に座り、戴冠式を行うことであった。

この大理石の石は、聖ヤコブ (Saint Jacob) が、自身の頭を乗せる枕にしたといわれる石であり、その聖ヤコブの大理石の枕石 (the Pillow of Jacob) を、歴代のダル=リアダ王は、権力の象徴石座として戴冠式の時使用していた。

なお、この権力の象徴である聖なる大理石の石座は、ブリテンがローマ帝国の支配から解かれた410年以降、500年頃に、ケルト系スコット族のリーダー、ファーガス=マックエルク (Fergus MacErc: ダル=リアダ王在位490-501) により、ヒベルニア (HIBERNIA: 現アイルランド) から¹⁰⁾、カレドニア (CALEDONIA: 緑樹林の地: 現スコットランド) 西部での征服地アーガイル (Argyll) 地域のアイオナ (Iona) に持ち込まれた石であった¹¹⁾。

カレドニア南部とイングランド北部、ノーサンブリアとの境界地域は、その後スコットランド王国を樹立する上で、重要な役割を演じてくる地域である。

6世紀頃、ユトランド半島から、北海を渡り、ブリテン、ノーサンブリアに遣って来たアングル族は、その半分が、北部のバンバラ (Bamburgh) で、すでに砦を造り居住していた原住民を襲い、占領し、その地に居続けた。その結果、547年に、アングル族のアイダ (Ida, King of Bernicia: 在位547-560) が、バーニシア王国 (the Kingdom of Bernicia) を建国することができた¹²⁾。

また、残りの半分のアングル族はノーサンブリア南部に移動し、559年、

9) David Breeze and Graeme Munro, *The stone of Destiny* Symbol of Nationhood, Historic Scotland, 1997, p. 19.

10) ヒベルニア (HIBERNIA) とは、ラテン語でアルピオンより西方の島国、古代アイルランド語でエイリン (Eirinn 西) の国、ゲール語でエール (Eire) の国であり、現在のアイルランドを指す言葉である。

11) David Breeze and Graeme Munro, *The stone of Destiny, op. cit.*, p. 16.

デアアラ王国 (the Kingdom of Deira) を建国した。

ダル＝リアダ王に就いたファーガス＝マックエルクは、王国の首都をデュナッド (Dunadd) にし、アイオナに小さな教会を建て、その教会に大理石の石座を据えた。

その後、ヒルベニアでの宗教上の大陸から、563年に、聖コロンバ (Saint Columba, 521.12.17-597.6.9) が、アイオナに亡命してきた。

聖コロンバは、アイオナを、キリスト教徒の拠点にするため、アイオナ修道院 (Iona Abbey) を建立し、そして、このアイオナ修道院に、聖なる大理石の石を移した¹³⁾。

その後、この聖コロンバの大理石の石は、ノース人と呼ばれるノルウェーの異教徒ヴァイキングからの略奪を逃れるために、アイオナから、ダル＝リアダ王国の首都デュナッドに、さらに7世紀初期に、ダンスタフナージ (Dunstaffnage) に移された。

また、この時期、ノーサンブリア北部、バーニシア王国では、アイダ王の息子アゼリック (Æthelric: Ethelric of Bernicia: 在位 568-572) が、568年に、王位に就いていた。

バーニシアのアゼリック王は、自身の治世の間、精力的に、強引に、南下し、自身の弟幼いエドウィン (Edwin, King of Deira: 後のノーサンブリア王 Edwin, Kingdom of Northumbria, c. 586-632/633. 10.12: ノーサンブリア王在位 c.616-632/633) を殺害し、デアアラ王国を、併合しようと画策した¹⁴⁾。だが、アゼリック王は、デアアラ王国の侵攻中、殺害された。

アゼリック王の死後、バーニシア王国を継承したのは、アイダ王の孫、ア

12) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, The History of England: from the Earliest Time to the Norman Conquest, to 1066, in William Hunt and Reginald L. Poole editors, Reprinted of 1914, edition, AMS Press, Kraus Reprint Co., 1969, p. 94 and p. 132.

13) 聖コロンバが亡命先にアイオナを選んだのは、聖ニニアン (Saint Ninian, c. 360-c. 432) 以来、カレドニア内での布教活動が、頓挫していたことを知っており、そのアイオナの地から、再度、布教活動を盛り返そうと思ったからである。

14) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 133.

・Mike Ashley, *A Brief History of British Kings & Queens*, *op. cit.*, p. 24.

ゼリック王の息子であるアゼルヴリス王（Æthelfrith：Athelfrith, Ethelfrid：Ethelfrith, King of Bernicia, died c. 617：在位593-617）である。

アゼルヴリス王は、王位に就くや否や、更なる権力を得るために、593年、同じアングル族の南部のデアアラ王国に侵攻した¹⁵⁾。

侵攻されたデアアラ王国の幼い王子エドウィン（Edwin, King of Deira：後のノーサンブリア王Edwin, Kingdom of Northumbria, c. 586-632/633. 10.12：ノーサンブリア王在位c.616-632/633）は、身の危険を感じ、604年以前に、彷徨しながら、グウィネズ王国（Kingdom of Gwynedd）に亡命した¹⁶⁾。

バーニシア王国のアゼルヴリス王は、604年に、デアアラ王国を併合し、ノーサンブリア王国（the Kingdom of Northumbria）を建国し、近隣諸国に侵攻し、治世の20年間以上のもの、勝利に勝利を重ね、権力を拡大させていった¹⁷⁾。

これに対して、幼いころに亡命させられ、そして成人したエドウィンは、自身の故郷デアアラ王国を奪還するために、616年の夏か初秋に、イングランド南部の君主連合、特にイースト＝アングリア王のレドワルダ（Redwald, King of the East Anglia：在位c. 599-c. 624）の力を借りることにした¹⁸⁾。

言い換えると、法的にデアアラ王国の継承者であるエドウィンは、イースト＝アングリア王のレドワルダの力を借りて、そして617年に、アイドル川（the Idle river）で、アゼルヴリス王を打つ破ることができたのである¹⁹⁾。

その結果、デアアラ王のエドウィンは、617年に、ノーサンブリア王エドウィンになった。

15) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 133.

16) Mike Ashley, *A Brief History of British Kings & Queens*, *op. cit.*, p. 24.

17) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 135.

18) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *ibid.*, p. 136.

・レドワルダ王が埋葬されたという墳墓が、1939年に、イースト＝アングリア、ディーベン川（River Deben）を見下ろす丘陵サットン＝フー（Sutton Hoo）で発掘された。このサットン＝フーの丘陵に、多量の宝物を乗せた巨大な船1隻が、丸ごと埋められていた。このサットン＝フーの丘陵墳墓は、アング＝ロサクソン時代当時の経済状況を考察するうえで、第1級の史料地である。

19) Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, Anglo-Saxon England, c. 550-1087, Third Edition, Reprinted of 1971, edition, Oxford：At the Clarendon Press, 2000, pp. 78-79.

・Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 137.

なお、この7世紀頃から、現スコットランド南東部、フォース湾（Firth of Forth）からツイード川（The River Tweed）のボーダー地方、エディンバラ（Edinburgh）を含むロシアン（Lothian）は、アングル族のバーニシア王国に吸収されていった。

言い換えると、638年以降、ロシアンは、アングル族のバーニシア王国の1部になっていったのである。

8世紀頃から異教徒ヴァイキングの奇襲、来襲が、本格化、多発化し、キリスト教の教会、修道院が略奪を受けるようになった。

1番初めにノース人のヴァイキングに奇襲を受けたのは、793年6月8日、バーニシア沿岸（Bernician coast）、石造りのリンデイスファーンの神の教会（God's church at Lindisfarne）である²⁰⁾。

バーニシア沿岸でのリンデイスファーンの神の教会：リンデイスファーン修道院（Lindisfarne Priory：リンデイスファーンのノルマン式小修道院 Lindisfarne's Norman Priory）は、約350年間、外部からの攻撃を受けることなく、安心感を持ってキリスト教の拠点として635年頃に建設され修道院であった。そこで、この無防備で、多数の高価な貴重品が存する修道院が、野心的なヴァイキング標的にされたのは、当然の結果であった。

また、異教徒ヴァイキングの略奪の例として、ノース人のヴァイキングによる795年のアイオナ修道院もある²¹⁾。

この795年に、アイオナ修道院の修道僧たちは、キリスト教徒にとって心のよりどころであるイエス＝キリストの生涯・言行を記録した福音書、『ケ

20) 793年に、リンデイスファーン修道院を略奪したのは、F. M. ステントン氏の研究によるとノース人、T. ホッジキン氏によるとテイン人、G. ジョネス氏によるとノース人であった。そこで、著者（川瀬）は、一般に異教徒のスカンディナヴィア人（the Scandinavia）がリンデイスファーン修道院を略奪したとすればよいが、敢えて、当時の時系列から考えて、ノース人とした。

・ Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 239.

・ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 258.

・ Gwyn Jones, *A History of the Vikings*, Second Edition, Reprinted of 1968, edition, Oxford University Press, 1986, p. 195.

21) Chris Tabraham, *The History of Scotland*, *op. cit.*, p. 15.

2017年6月 川瀬 進：マルカム2世によるスコットランド王国の領土拡大

ルズの書 (The Book of Kells)』を、異教徒ヴァイキングからの略奪を逃れるために、ヒベルニア (現アイルランド) に持ち込んでいた。

スコット族のダル=リアダ王ケニス=マッカルピンは、ノース人のヴァイキングからの襲撃を避けるため、王国の宮廷を、デュナッド (Dunadd) から、奥地で、ピクト族の中心都市であったパース (Perth) のスクーン (Scone) に遷都した。

この王宮の遷都に伴い、聖なる石も、838年に、ダンスタフナージから、スクーンに移した²²⁾。

この時スクーンに移された聖なる石をストーン=オヴ=スクーン (THE STONT OF SCONE：スクーンの石) と、言われる。

ケニス=マッカルピン王が、自国のダル=リアダ王国を、ヴァイキングの襲撃、略奪から逃れるために、精一杯努力していた一方、同じブリテンの南部の隣国では、ウェセックスのエグバート王 (Egbert, King of Wessex：在位802-839) が、826年に、自国のウェセックスにマーシアを吸収合併し、ウェセックス=マーシア王に就き、後のイングランド王国ともなる自国を強国にしていた²³⁾。

なお、ウェセックス=マーシア王のエグバートは、829年に、ブレトワルダ (Bretwalda：ブリテンの支配者、覇王) になった。

ノース人のヴァイキングは、841年に、ヒベルニア (現アイルランド) のダブリン (Dublin) に要塞を建設した。

この要塞地ダブリンに、ヴァイキング・スカンジナビア (Scandinavia) の血統を引く王朝が王宮を構え、そこから、ヴァイキングは、ブリテン島西岸を襲撃し、勢力を拡大させていった。

このノース人の勢力拡大に少しでも対抗するため、ダル=リアダ王のケニス=マッカルピンは、聖なる石・ストーン=オヴ=スクーンに座り、843年に、

22) The Administrator Scone Palace, *Scone Palace, Scotland* : The Home of the Earls Mansfield, Woodmansterne, Ltd., p. 2. (本書にはページ番号が打っていないので、著者 (川瀬) が表紙を除いた部分から数えて2頁目)

23) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 264.

スコット族とピクト族が融合したアルバ連合王国（The United Kingdom of Alba）を建国し、王に就いた。

この連合王国は、単にアルバ王国（=スコットランド王国：現スコットランド）といわれるようになった。

連合王国創設により、ケニス=マッカルピンは、アルバ王国の王ケニス1世=マッカルピン（Kenneth I, MacAlpin, 810-858.2.13：アルバ王在位843-858）になった。

なお、『The Pictish Chronicle（ピクト王の年代記）』によると、ケニス1世=マッカルピンは、849年に、アイオナ修道院に埋葬されている聖コロンバの遺骨²⁴⁾、その遺骨を納めたモニーマスクの聖遺骨箱（The Monymusk Reliquary）を、アイオナ修道院から、自ら建立したダンケルド（Dunkeld）の教会に移した²⁵⁾。

このモニーマスクの聖遺骨箱のダンケルドへの移送は、第一義的には当然、ヴァイキングからの略奪を逃れるためである。

また、第二義的には、このダンケルドの地を、キリスト教信仰の中心地にしたいということである。

このことは、キリスト教という宗教の力を借りて、未だに支配できていない北東部僻地のピクト族を融合し、ピクト族全域を支配したいという気持ちである。

問題なく、スコット王国とピクト王国とが、経済的・国防的利害関係が一致し、平和的・友好的に融合した。

そして、小さな王国であるダル=リアダ王国のケニス1世=マッカルピンは、大きな王国であるアルバ王国に敬意を表し、融合と同時に、王国名にアルバという名前を使用した。

また、当時の力関係から言うと、大きな王国のアルバ王が、連合王国の王

24) Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 42.

25) David Breeze and Graeme Munro, *The stone of Destiny*, *op. cit.*, p. 19.

・このモニーマスクの聖遺骨箱（The Monymusk Reliquary）は、スコットランド博物館（The Museum of Scotland）に展示してある。

になるはずであった。

だが、問題のない平和的・友好的な融合であったからこそ、ケニス1世=マッカルピンが、融合したアルバ王国（=スコットランド王国:現スコットランド）の王になれたのであった。

ケニス1世=マッカルピンは、父アルピンからダル=リアダ王国を受け継ぎ、順調に、アルバ王に就くことができた。そしてこのことから、後世の経済史家が考えて、ケニス1世=マッカルピンが、アルピン王家の開祖と考えられる。

アルバ王国の王位に就いたケニス1世=マッカルピンは、即座に、自身の地位保持、自国王国の存続を考えなければならなかった。

すなわち、ケニス1世=マッカルピンの喫緊のアジェンダ（Agenda：政策課題）は、自身の地位の安定（権力）、そして、アルバ王国の安心（国防）、安全（治安）、安定（経済）、保護（福祉）、領土拡大を考え、実行しなければならなかったのである。

Ⅲ. 王位継承

ケニス=マッカルピンは、アルバ王国の王ケニス1世=マッカルピンとして、838年に、ダンスタフナージから、アルバ王国の王宮スクーンに移した聖なる石・ストーン=オヴ=スクーンの上に座り、843年に、戴冠式を行い、公的に王位に就いた。

このアルバ王ケニス1世=マッカルピンからマルカム2世まで、主要なアルピン王家の継承たちは、コンスタンティン1世（Constantine I, ? -877：在位863-877）、ドナルド2世（Donald II, ? -900：在位889-900）、マルカム1世（Malcolm I, ? -954：在位943-954）、ケネス2世（Kenneth II, ? - 995：在位971-995）である。

この王位継承は、長子継承ではなく、アルピン王家独特のタニストリー=システム（Tanistry System：王（族長）在任中の親族による王（族長）後継者選定制度であった²⁶⁾。

このアルピン王家独特のタニストリー＝システムは、現存の王が生きている間に、王族の親戚者によって、次期王が決定されるという王位継承制度であった。ゆえに、その継承には、かなりのゴタゴタが生じた。

親族の中には、現存の王（族長）よりも、領土が大きく、経済力が強い者がいる。

この経済力が強いということは、当然、軍事力も強であり、親族に中での発言力も強である。

このような状況下では、現存している王よりも、自身が王に就きたいという者が現れるのは、自然の成り行きである。

結果的に、アルピン王家独特のタニストリー＝システムにより、親族間でのゴタゴタ、つまり戦争や暗殺が、頻発したのである。

ケニス1世＝マッカルピンが、ノーサンブリアへの6度目の遠征中、858年2月13日、がん：悪性腫瘍（cancer）で亡くなると、その後、アルバ王国の王位を継承したのは、アルピン王家独特のタニストリーにより、彼の弟ドナルド1世（Donald I, 812-862.4.13：在位858-862）が王位に就いた²⁷⁾。

ドナルド1世は、ダル＝リアダ王アルピンの2男であるが、兄ケニス1世＝マッカルピンのように、異教徒ヴァイキングと戦った記録はない²⁸⁾。

その後、アルバ王国の王位を継承したのは、アルピン王家直系に戻り、ドナルド1世の甥・ケニス1世＝マッカルピンの長男コンスタンティン1世（Constantine I, ?-877：在位862-877）である²⁹⁾。

26) Rosalind Mitchison, *A History of Scotland*, Second Edition, Reprinted of 1970, edition, Methuen : London and New York, 1982, p. 13.

27) David Ross, *Scotland History of Nation*, New Edition, Reprinted of 1999, edition, Lomond Books, 2014, p. 52.

28) A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland : The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 90.

29) このケニス1世＝マッカルピンの長男コンスタンティン1世（Constantine I, 862-877）を、コンスタンティン2世と言えるかもしれないが、それは、ダンケルドで、教会設立に功績があったコンスタンティン＝マック＝ファーガス（Causantín mac Fergusa, c. 775-820）を、コンスタンティン1世と数えた時であり、それは、ビクトリア時代までのことであった。よって、ケニス1世＝マッカルピンの長男を、コンスタンティン1世とした。

コンスタンティン1世治世時、デンマーク王バグセッジ (Bagsecg：在位860-871) 指揮の下、ヴァイキング・デイン人 (the Danes) の大軍の来襲は、激しさを増し、アングロ=サクソンのノーサンブリア王国の主要都市ヨーク (York) を867年に占領し、そのノーサンブリアの地をデンマーク王国の1部にし、その首都をヨルヴィーク (Jorvuk：ヨークYork) にした。

この9世紀末のデイン人の来襲の結果、イングランド北東部、ノーザンブリアは勿論のこと、イースト=アングリア、マーシアの大半が、デイン人によって征服・支配・定住されてしまった。

このデイン人の来襲の激化の中、まだ征服されていなかったアングロ=サクソン王国ウェセックスでは、アルフレッド (アルフレッド大王 Alfred the Great, 849-899.10.26：在位871-899) が王位に就いた。

デイン王グスルム (Guthrum, ? - d. 890) 率いるデイン人軍は、878年1月、残るアングロ=サクソン王国ウェセックスに侵攻し、チップペンハム (Chippenham) の王領地で、アルフレッド軍を、奇襲した³⁰⁾。

奇襲されたアルフレッド王は、サマセット (Somerset) の森で囲まれた沼沢地アセルニー島 (the Isle Athelney) に逃げ込まざるを得なくなった。

アルフレッド王は、このアセルニーで、反撃のため軍事的体制を整え、デイン王グスルムと戦いを臨み、878年5月エサンドゥーの戦い (the battle of Ethandune：エディントンの戦い the Battle of Edington) となった³¹⁾。

エサンドゥーの戦いの結果、アルフレッド王は勝利し、デイン人からウェセックスを死守することができた。

そして、アルフレッド王は、デイン人とウェドモアの和議 (Treaty of Wedmore) を結び、デイン王グスルムを、キリスト教徒に改宗させた³²⁾。

改宗したデイン王グスルムは、サクソンネーム、すなわちクリスチャンネー

30) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 283.

31) ・ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 285.

・ Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 255.

32) ・ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 285.

・ Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 257.

ムを、アセルスタン (Athelstan) とした³³⁾。

そこで、アングロ=サクソン人のアルフレッド王が、アングロ=サクソン人の各王の中で唯一、アングロ=サクソン人の地ウエセックスを、ヴァイキングのデイン人から、死守できたことを称え、後世の経済史家がアルフレッド王に、大王 (the Great) というニックネームを与えたのである。

なお、その後アルフレッド大王は、ロンドンを奪還し、885年に、デイン王グスルムと、第2回目のウエドモア和議を締結させ、デイン人の住む地と、アングロ=サクソン人の住む地を画定させた³⁴⁾。

この画定により、ローマ時代につくられた東西を走る道・ロンドンからチェスターに通ずるウォトリング=ストリート (Watling Street) の北側にデインロー (Danelaw : デイン人の法律が支配した居住地)、その南側にアングロ=サクソン人の居住地ができた。

デインロー内には、各所に小さな居住地ができ、その居住地名の最後にビー (by : デイン人の居住地、・・・村) という文字が付けられた。

具体的には、Grimsby、Derby、Corby、Rugby・・・である。

そして、デイン人は、デインロー内の居住地に、デイン人の要塞基地として、ヨルヴィーク (Jorvuk : ヨーク York) は勿論のこと、5城塞市 (the Five Boroughs : レスター、リンカン、ノッティンガム、スタムフォード、ダービー) を建設した³⁵⁾。

なお、アルフレッド大王の支配地・アングロ=サクソンの地では、各所の小さな居住地名の最後に、バロー (burghs : borough : デイン人を締め出した居住地) という文字が付けられた。

具体的には、Marlborough、Crowborough、Farnborough・・・である。

ノーサンブリア北部、ロシアンを含む旧バーニシア王国の首都であったバ

33) · Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 285.

· Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 257.

34) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 288.

35) · Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 316.

· Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 358.

2017年6月 川瀬 進：マルカム2世によるスコットランド王国の領土拡大

ンボロー (Bamburgh) では、デイン人の略奪恐怖に晒されながらも、半独立を保っていた。

言い換えると、バンボロー地域は、ノーサンブリア王国に属しながらも、デンマーク王国のデイン人に、生活面、経済面でかなり譲歩を強いられていたということである。

アルバ王のコンスタンティン1世は、異教徒ヴァイキングと戦ったが、敗北し、捕らえられ、877年に、殺害された³⁶⁾。

その後、アルバ王国は、アルピン王家独特のタニストリーにより、ケニス1世=マッカルピンの2男、コンスタンティン1世の弟エイ (Aed, ? -878 : 在位877-878) が統治した。

エイは、ストラザラーン (Strathallan) で戦死、その1年後、ドナルド1世の皇太子ギリック (Giric, ? - ? : 在位878-889) と、ケニス1世=マッカルピンの長女とストラスクライド (Strathclyde) の王ラン=マッカーサゲイル (Rhun Macarthagall) の息子ヨーカ (Eochaid : 在位878-889) とが、共同統治にあたった³⁷⁾。

共同統治後のアルバ王は、アルピン王家直系に戻り、ケニス1世=マッカルピンの孫、コンスタンティン1世の息子であるドナルド2世 (Donald II, ? -900 : 在位889-900) が継承した。

アルバ王国へのヴァイキングの来襲、植民化が、890年頃、さらに激化し、オークニー (Orkney)、シェトランド (Shetland)、ヘブリディーズ (Hebrides)、ケイスネス (Caithness) が、ハーラル1世 (Harald I : ハーラル美髪王 Harald Fairhair, c. 850-c. 932 : 在位872-930) のノルウェー王国の1部になってしまっていた³⁸⁾。

また、このことにより、オークニー諸島等と、国境を接しているアルバ王

36) A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland : The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 90.

37) A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland : The Making of the Kingdom, *ibid.*, p. 91.

38) David Ross, *Scotland History of Nation*, New Edition, *op. cit.*, p. 294.

国との間に、絶え間ない緊張感が続くことになった。

言い換えると、ノルウェー王国のハーラル1世美髪王とアルバ王国のモレー大領主 (Mormaer of Moray) とは、敵対関係になってしまったのである。

ヒベルニア (現アイルランド) のダブリン、すなわちノース人のヴァイキングの本拠地であるダブリンから、ブリテン島西岸が、890年頃から絶え間ない急襲、植民化を受けるようになった。

その結果、危機感を感じたストラスクライドのブリトン人は、890年頃から、故郷のカムリ (Cymry: ウェイルズ) の北部グウィネズ (Gwynedd: ウェイルズの北部) へ、また南部のカンプリア (Cambria) へ逃げざるを得なくなっていた。

このヴァイキングの植民化に対し、ドナルド2世は、ヴァイキングのデイン人 (the Danes) と、アバディンシャー (Aberdeenshire)、ストーンヘヴン (Stonehaven) 近くのダノター (Dunnottar) で戦ったが、結果は、900年にフォレス (Forres) で捕らえられ、殺害されてしまった³⁹⁾。

ドナルド2世の戦死後、アルバ王国の王位を継承したのは、アルピン王家独特のタニストリー=システムにより、エイの長男コンスタンティン2世 (Constantine II : c. 879-952 : 在位900-943) である。

アルバ王のコンスタンティン2世は、ブリトン族のストラスクライドを、907年に併合し、そのストラスクライドの王に、908年、自身の弟ドナルド (Donald) を就けた⁴⁰⁾。

コンスタンティン2世は、アルバ王国の南西部地域を拡大したものの、アルバ王国を形成する7大領主のうち⁴¹⁾、北部のモレー (Moray) の台頭や、異教徒ヴァイキングの来襲によって、頭を悩まされるようになった。

39) A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland : The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 91.

40) James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History Story of a Nation*, *op. cit.*, p. 72.
Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 44.

41) アルバ王国の7大領主とは、ケイスネス (Caithness)、ロス (Ross)、マーンズ (Mearns)、アンガス (Angus)、ストラセアーン (Strathearn)、ファイフ (Fife)、モレー (Moray) である。

2017年6月 川瀬 進：マルカム2世によるスコットランド王国の領土拡大

また、コンスタンティン2世は、マン島 (the Island Man) から、アルバ王国の南部とノーサンブリア北部のボーダー地方に奇襲攻撃して来たノース人のヴァイキングにも悩まされた。

この奇襲攻撃は、タイン川 (the River Tyne) 北部、丘陵地コーブリッジ (Corbridge) の地で、918年のコーブリッジの戦い (the Battle of Corbridge) となった⁴²⁾。

具体的には、ノース人のヴァイキング、イヴァール=ザ=ボーンレス (Ivar the Bonelss : Ívar : Ívarr : Ímar, d. 873) の孫ラグナル (Ragnall ua Ímair : Rognvald, d. c. 920 : ヨーク王在位918-921) + 彼の同盟軍 vs. コンスタンティン2世 + バンボローのエアドレッド1世 (Ealdred I of Bamburgh : 在位913-c. 993) である。

このノース人の奇襲攻撃、918年のコーブリッジの戦いの結果は、決着がつかなかった。

そこで、ノース人のヴァイキング、イヴァール=ザ=ボーンレス (Ivar the Bonelss : Ívar : Ívarr : Ímar, d. 873) の孫ラグナル (Ragnall ua Ímair, d. c. 920 : ヨーク王在位918-921) は、南下し、ノーサンブリアのデイン人のヴァイキングと戦い、919年に、主要都市ヨルヴィーク (Jorvuk : ヨークYork) を占領した。

この現状に対し、ウェセックス=マーシア王アセルスタン (Athelstan, King of Wessex and Mercia, c. 895-939 : 在位924-939) は、ノーサンブリアの主要都市ヨルヴィーク (Jorvuk : ヨークYork) を、927年に、奪還した⁴³⁾。

このヨルヴィーク、すなわちヨークの奪還により、デインロー内で農民化していたデイン人たちも、ウェセックス=マーシア王アセルスタンの支配を受けるようになった。

42) ・ David Ross, *Scotland History of Nation*, New Edition, *op. cit.*, p. 53.

・ A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland : The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 92.

43) ・ David Ross, *Scotland History of Nation*, New Edition, *op. cit.*, p. 53.

・ A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland : The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 92.

なお、この927年のノーサンブリアの侵略後、ウェセックス=マーシア王アセルスタンは、イングランド王アセルスタン (Aethelstan, King of England : 在位927-939) になった。

言い換えると、ウェセックス=マーシア王アセルスタンは、自国のウェセックス=マーシア領土を、ヨリ拡大させることによって、ヴァイキングのデイン人からの脅威を取り除き、独立を確保し、927年、イングランド王国を創設させ、最初のイングランド王に就いたのである。

この占領によって、コンスタンティン2世は、アルバ王国建国以来、非常に、危機的状況に陥ってしまった⁴⁴⁾。

というのは、アルバ王国よりも軍事力が優っているウェセックス=マーシア王アセルスタンは、ノーサンブリアの占領に乗じて、アルバ王国の南部ストラスクライドも占領したからである。

この危機的状況を打開するため、コンスタンティン2世は、スコット族のアルバ軍内に、ブリトン人、ヴァイキングのデイン人を引き込み、同盟軍を形成し、イングランド王アセルスタンと彼の弟エドモンド (その後のイングランド王エドモンド1世 Edmund I, c. 921-946.5.26 : 在位939-946.5.26) 率いるノーサンブリア軍と戦った。

その戦いは、937年のブルナンブルフの戦い (the Battle of Brunanburh) と呼ばれ、結果は、イングランド王アセルスタンは、ブリトン人を含むスコット人のアルバ軍とヴァイキングのデイン人を撃破し勝利した⁴⁵⁾。

敗北したアルバ王コンスタンティン2世は、イングランド王アセルスタンに、オマージュ (Homage : 臣従礼) を執らざるを得なかった。

それ故、コンスタンティン2世は、937年、廃位に追い込まれた⁴⁶⁾。

そして、イングランド王アセルスタンは、939年に亡くなると、アルバ王

44) A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland : The Making of the Kingdom, *ibid.*, p. 91.

45) David Ross, *Scotland History of Nation*, New Edition, *op. cit.*, p. 53.

・Rosalind Mitchison, *A History of Scotland*, *op. cit.*, p. 12.

・James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History Story of a Nation*, *op. cit.*, p. 73.

46) David Ross, *Scotland History of Nation*, New Edition, *op. cit.*, p. 294.

2017年6月 川瀬 進：マルカム2世によるスコットランド王国の領土拡大

コンスタンティン2世は、943年にセント＝アンドルーズ（St Andrews）の修道僧になり、943年に亡くなった⁴⁷⁾。

その後のアルバ王は、アルピン王家直系に戻り、ドナルド2世の息子マルカム1世（Malcolm I, c. 900-954：在位943-954）が、継承した。

また、イングランド王には、アセルスタンの弟エドモンド1世（Edmund I, 922-946.5.26：在位938-946.5.26）が、939年に就いていた。

エドモンド1世は、兄アセルスタン王から引き継いだ、経済的利益を生まない辺境地カンブリア（Cambria）が、重荷になっていた。

というのは、占領したカンブリアが、ブルナンブルフの戦い後、海からドイツ人やノース人のヴァイキングの襲撃を頻繁に受け、彼らが大挙して入植してくるようになっていたからである⁴⁸⁾。

イングランド王エドモンド1世は、このカンブリアを占領し続けるのに莫大な戦費が必要であり、頭痛の種であった。

そこで、エドモンド1世は、945年に、このカンブリアの宗主権を、アルバ王コンスタンティン2世に、譲渡することにした⁴⁹⁾。

その譲渡の条件として、イングランド王エドモンド1世は、アルバ王コンスタンティン2世に対し、主従関係を結ばせた。

具体的には、アルバ王コンスタンティン2世が、イングランド王エドモンド1世に対し、封建制度による主従関係、オマージュ（Homage：臣従礼）を執り、忠誠を誓うということである⁵⁰⁾。

そこには、当然、イングランド王エドモンド1世が、軍事的危機状態に陥った場合、アルバ王コンスタンティン2世が、イングランド王エドモンド1世に、

47) Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 47.

・David Ross, *Scotland History of Nation*, New Edition, *op. cit.*, pp. 53-54.

・James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History Story of a Nation*, *op. cit.*, p. 73.

48) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 317.

49) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 341.

・A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland: The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 93.

・Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 359.

50) Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 49.

軍事的サポートをしなければならぬ義務が含まれている。

このカンブリアの宗主権譲渡により、マルカム1世は、カンブリアを、945年にアルバ王国内に組み入れ、領土を拡大させることができた。

一方、海からヴァイキングの襲撃を、頻繁に受けていたイングランド王国のノーザンブリアでは、947年にノルウェー王国のハーラル1世美髪王の長男で、王位を追われ亡命中であったエリク＝ブラダックス (Eric Bloodaxe, c. 885-954 : ノルウェー王在位 930-934 : ノーザンブリア王在位 947-948、952-954) によって占領された。この占領によって、エリク＝ブラダックスが、ノーザンブリア王に就いた。

また、アルバ王国では、マルカム1世が、北部および南部のピクト人との宗教的対立から、954年、キンカーディンシア (Kincardineshire) の、フェターレスの戦い (the Battle of Fetteresso) で、軍事力を強化していたモレーの人びとによって、に虐殺された⁵¹⁾。

マルカム1世が、殺害された後、アルバ王位は、アルピン王家独特のタニストリー＝システムにより、コンスタンティン2世の長男インダルフ (Indulf, ? -962 : 在位 954-962) が受け継いだ。インダルフ王は、アルバ王国の南部がノーサンブリア軍によって侵攻されているため、ノーサンブリアの王国の首都ヨルヴィークに向け進撃した。

ノーサンブリア王エリク＝ブラダックスは、948年に、サクソン人で、イングランド王のエドレッド (Edred, 923-955.11.23 : 在位 946.8.16-955.11.23) によって、1度ノルウェーに追いつ返されたものの、再度、その4年後の952年にノーサンブリアに舞い戻っていた。

このことに対して、イングランド王エドレッドは、現下臣のバンボローの領主オスルフ (Osulf : Oswulf, lord of Bamburgh) に、命じて、ノーサンブリアの首都ヨルヴィークに居住している前君主エリク＝ブラダックスの討伐

51) · James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History Story of a Nation*, *op. cit.*, p. 73.
· Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 49.
· A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland : The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 95.

を命じた。

結果は、954年のステインムーアの闘争（the Battle of Stainmoor）になり、バンボローの領主オスルフが、前君主のエリク＝ブラダクセを裏切り、殺害した⁵²⁾。

この成果に対し、バンボローの領主オスルフは、バンボロー伯オスルフ（Osulf : Oswulf, Earl of Bamburgh）になった。

エリク＝ブラダクセが亡くなった954年以降、ヨルヴィークという地名は、再度ヨークになった。また、この時点から、ノーサンブリア王という称号は、無くなった。

このイングランド領地、ノーサンブリア、ヨークで、政権が激変している最中、アルバ王のインダルフが、攻め入った。

なお、アルバ王のインダルフは、ヨルヴィーク侵攻中の954年に、ノーサンブリア王エリク＝ブラダクスの支配下にあったエディンバラ（Edinburgh）を掌握した。

また、アルバ王のインダルフが、エディンバラを掌握した954年頃、アルピン王家（the Alpin）の最後の後継者と成るマルカム2世（Malcolm II, c. 954-1034.11.25 : 在位1005.3.25-1034）が生まれている。

そしてその後、インダルフ王は、962年、ヨークから移動し、新しい居住地を求めている最中、バンフシア（Banffshire）のカリン（Cullen）、あるいはキンカーディンシア（Kincardineshire : マーンズ Mearns）のカーウィ（Cowie）のどちらかの河口で、ヴァイキングとの戦いに敗れ、戦死し、セント＝アンドルーズに葬られた⁵³⁾。

インダルフ王の後のアルバ王は、アルピン王家直系に戻り、マルカム1世の長男ダブ（Dubh : Duff, ? -967 : 在位962-967）が受け継いだ。

52) ・ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 342.

・ A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland : The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 95.

53) ・ Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 49.

・ A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland : The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 95, and n.34.

ダブ王は、王の存命中に次期国王を決めるというタニストリー＝システムに否定的な考えを持ち、アルピン王家の直系として国王になった。だが、タニストリー＝システムに賛成的なインダルフ王の長男、コリン（Colin：クレンCulen, ? -971：在位967-971）によって、967年、フォレス（Forres）で、暗殺されてしまった⁵⁴⁾。

アルバ王になったコリン王は、自身の弟共に、ストラスクライド王のリデルヒ（Riderch：アムダルヒAmdarch）によって、971年、ロシアン（Lothian）の地で、ホール火災により殺害された⁵⁵⁾。

殺害の理由は、ストラスクライド王リデルヒの娘が、アルバ王コリンにより、レイプされたからであった⁵⁶⁾。

その後のアルバ王を継承したのは、タニストリー＝システムにより、ダブ王の弟ケネス2世（Kenneth II, 971-995）である。

ケネス2世は、966年に、アルバ王国と国境を接するノーザンプリア北部に、奥深く南下し、領土を拡大させ始めた⁵⁷⁾。

その結果、ケネス2世は、971年頃、ウェセック出身のイングランド王エドガー1世（Edgar I of Wessex：エドガー平和王Edgar the Peaceful, 944-975.7.8：ノーザンプリア、マーシア、ウェセックス王在位957-975.7.8：イングランド王在位959.10.1-975.7.8）により、ノーザンプリアの一部であったロシアンの領土を譲渡された⁵⁸⁾。

この時点で、ロシアンを領有するアルバ王国とイングランド王国のノーザンプリアとの国境が確定した。

54) ・ Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 50.
・ A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland : The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 95.

55) ・ Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 50.
・ A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland : The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 95.

56) A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland : The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 95.

57) James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History Story of a Nation*, *op. cit.*, p. 74.

58) David Ross, *Scotland History of Nation*, New Edition, *op. cit.*, p. 54.

この時期、アルバ王国と同様、イングランドでも、王位継承がスムーズに行っていなかった。

というのは、エドワード殉教王 (Edward the Martyr, c. 962-978.3.18 : 在位 975-978) が、978年3月18日、その後イングランド王に就く弟エゼルレッド2世 (Æthelred II : Ethelred II, “the Unready 無思慮王” : “the Redeless 無計画王”, 968-1016.4.23 : 在位 978-1013, 1014-1016) の母エルフリーダ (Elfrida : Elfthryth, c. 945-1000)、すなわち継母によって、イングランド南西部ドーセットシャー (Dorsetshire) のコーフ (Corfe) で暗殺されたからである⁵⁹⁾。

継母エルフリーダにとっては、自身の息子エゼルレッド2世がイングランド王位を継承するのは、願っていることである。

だが、イングランド人民にとっては、エゼルレッド2世の王位継承は、必ずしも願っていたことではなかった。

言い換えると、イングランド王としてのエゼルレッド2世の資質に問題があったからである。それは、後世の経済史家が、エゼルレッド2世を、アンレディ (Unræd : Unready : 無思慮王)、リッドレス (Redeless : 無計画王) と名付けたことから判明できる⁶⁰⁾。

エドワード殉教王が亡くなって以降、980年代から、デイン人の侵略が激しさを増してきていた。

なお、エゼルレッド2世は、980年代の中頃、ヨーク貴族の娘エルフギフ=オヴ=ヨーク (Ælfgifu of York, c. 970-1002) と結婚し、エドモンド2世=アイアンサイド (Edmund II, ‘Ironside (剛勇王)’, c. 988-1016.11.30 : イングランド王在位 1016.4.23-1016.11.30) を儲けていた。

イングランド王エゼルレッド2世にとって、この結婚は、第1回目の結婚である。

一方、アルバ王国では、ケネス2世が南部の領土を拡大できたものの、北部では、987年に、ノルウェーのヴァイキングであるシーガード (Sigurd, c.

59) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 363.

60) Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 395.

・ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 398.

960-1014.4.23) に、オークニー諸島からモレー奥深くまで南下され、サザランド (Sutherland)、ロス (Ross)、モレーの1部を略奪されてしまった⁶¹⁾。

その略奪後、991年に、シーガードは、ノルウェー王領オークニー伯シーガード (Sigurd, Earl of Orkney, c. 960-1014.4.23 : 在位c. 991-1014) になった。その当時のノルウェー王は、デンマークの臣下であったが、事実上の王であったハーコン=シグルズソン (Håkon Sigurdsson, c. 935-995 : 在位975-995) が就いていた。

当然、オークニー伯シーガードは、ハーコン=シグルズソンに、オマージュ (Homage : 臣従礼) を執りにノルウェーに行っている。

ノルウェー王ハーコン=シグルズソンは、このオークニー諸島を拠点にして、軍備を整え、アルバ王国、ヒベルニア (HIBERNIA : 現アイルランド)、イングランドの沿岸を、略奪していった。

また、この991年に、デンマーク王スヴェン1世 (Sweyn I : Swegen I, "Forkbeard : 八の字ひげ王", King of Denmark, 960-1014.2.3 : デンマーク王在位985-1014 : ノルウェー王在位985-995, 1000-1014 : イングランド王在位1013-1014) から命を受けたノース人のヴァイキング、オラフ=トリグヴァソン (Olaf Tryggvason : 後のノルウェー王オラフ1世c. 960-c. 1000.9.9 : ノルウェー王在位995-1000) の軍艦隊が、エセックス沿岸に到着し、エセックス伯バイヒトノス (Byrhtnoth : Brihtnoth, Ealdorman of Essex, d. 991.8.10) と、モールドン (Maldon) の地において、戦いが生じた。

すなわち、991年8月、モールドンの戦い (The Battle of Maldon) である⁶²⁾。

このモールドンの戦いの結果、エセックス伯バイヒトノスが、槍で殺害されることによって、エセックスがデイン人により、侵攻、略奪され始めた。

これに対して、イングランド王エゼルレッド2世は、デンマーク王スヴェン1世の命を受けたデイン人たちによる略奪行為、すなわち、寄進された金銀の宝飾がある教会、修道院の略奪に耐え切れず⁶³⁾、デイン人を、このイングラ

61) David Ross, *Scotland History of Nation*, New Edition, *op. cit.*, p. 54 and p. 971.

62) · Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 381.

· Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 377.

63) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 371.

2017年6月 川瀬 進：マルカム2世によるスコットランド王国の領土拡大

ンドの地から退去してもらうためのガフォール（Gafol：デイン人への退去料）という特別税の地租を創設し、10,000ポンドを支払わざるを得なくなった⁶⁴⁾。

その後のガフォールの支払いは、以下の表1の通りである⁶⁵⁾。

Gafol：—

991	First payment	10,000 pounds (of silver)
994	Second	16,000
1002	Third	24,000
1007	Fourth	36,000 (in two MSS. 30,000)
1009	Local payment, East Kent	3,000
1012	Fifth	48,000
1014	Sixth	21,000
		158,000 pounds of silver.

表1 Source：Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, The History of England：from the Earliest Time to the Norman Conquest, to 1066, in William Hunt and Reginald L. Poole editors, Reprinted of 1914, edition, AMS Press, Kraus Reprint Co., 1969, p. 382.

このガフォールは、アングロ＝サクソン王時代に使われた言葉であり、その後、アングロ＝ノルマン王時代には、デインゲルド（Danegeld：デイン人への退去料）と呼ばれる言葉になった⁶⁶⁾。

アルバ王国のケネス2世は、アンガス伯（Mormaor of Angus）の娘であり、マーンズ大領主（Mormaer of Mearns）の夫人であるフェネラ（Fenella：フェネリア Fenelea, 950-995）によって、フェテアカイム（Fettercaim）で、995年に暗殺された⁶⁷⁾。

64) · Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 381.

· Cyril E. Robinson, *England：A History of British Progress from the Early Ages to the Present Day*, Thomas Y. Crowell Company, 1928, p. 32.

65) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 382.

66) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 381. n. 1.

67) Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 52.

殺害の要因は、フェネラは、自身の息子が、ケネス2世によって殺害されたからである。

なお、フェネラは、ケネス2世の下臣によって、同年995年に、殺された。

ケネス2世が995年に亡くなった後、アルバ王国では、タニストリー＝システムに否定的な見解が芽生え始めた⁶⁸⁾。

だが、ケネス2世後のアルバ王も、995年に、タニストリー＝システムにより、コンスタンティン3世 (Constantine, c. 971-997 : 在位 995-997) が就いた。

なお、この995年に、ノルウェー王は、ハーコン＝シグルズソンから、オラフ＝トリギバソン (Olaf Tryggvason, King of Norway : ノルウェー王オラフ1世 960-1000.9.9 : 在位 995-1000) に代わった。

このノルウェー王オラフ＝トリギバソンは、995年に、洗礼を受け熱心なキリスト教徒になった⁶⁹⁾。

このキリスト教に対するオラフ＝トリギバソンの熱心さは、彼がヒルベニアのダブリンからノルウェーに帰る途中、オークニー諸島のサウス＝ウォールズ島 (South Walls) に立ち寄り、995年に、そのサウス＝ウォールズ島に、異教徒のオークニー伯シーガードを呼びつけ、オマージュを執らせ、シーガード伯およびオークニー諸島の領民たちを、強引にキリスト教徒に改宗させた。

このキリスト教徒への強引な改宗を確実なものにするために、オラフ＝トリギバソンは、シーガードの息子フンド (Hund : フロードヴ Hlodve, c. 990-998) を人質として、ノルウェーに連れて帰った。

キリスト教徒になったオークニー伯のシーガードは、隣接するキリスト教国であるアルバ王国の住民への略奪を止めた。

だが、強引に、人質としてノルウェーに連れていかれた息子フンドが、オラフ＝トリギバソンにより、殺害された時、オークニー伯のシーガードは、即、ノルウェー王オラフ＝トリギバソンに対するオマージュを止め、報復手段に出た。

68) David Ross, *Scotland History of Nation*, New Edition, *op. cit.*, p. 54.

69) A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland : The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 82.

すなわち息子を殺害された報復のため、オークニー伯のシーガードは、再度、ヴァイキング化し、アルバ王国の国境沿いを襲撃し、モレー大領主内へ南下していったのである。

また、この995年、キリスト教国のイングランドのノーザンプリアでは、異教徒の襲撃から逃れるために、聖カスバート (St. Cuthbert, 635-687) の遺骸を、バーニシア沿岸 (Bernician coast) のリンディスファーン (Lindisfarne) から、ダラム大聖堂 (Durham Cathedral) に埋葬した⁷⁰⁾。

それ以来、ダラム市は、キリスト教徒の聖地、イングランド王国北部の軍事的要衝地になった。

アルバ王国内では、コンスタンティン3世後、アルピン王家直系に戻り、ケネス3世 (Kenneth III, 967-1005：在位997-1005) が就いた。

このコンスタンティン3世治世時、1002年に、イングランド王エゼルレッド2世は、ノルマンディー公リチャール1世 (Richard I, 933.8.28-996.11.20：在位942-996) の娘エンマ=オヴ=ノルマンディー (Emma of Normandy, c. 985-1052.3.6) と結婚した。

70) ・ヒベルニア (HIBERNIA：現アイルランド) 生まれの司教エイダン (後の聖エイダン Saint Aidan, d. 651) が、キリスト教化のため、ノーザンプリアに遣って来て、そして、キリスト教徒に改宗していたノーザンプリア王オスワルド (Oswald, King of Northumbria) から許可を得て、バーニシア沿岸 (Bernician coast) のリンディスファーン (Lindisfarne) に、635年頃、ノルマン式小修道院 (Lindisfarne's Norman Priory) を建てた。そして、聖エイダンの死を予言した司教カスバート (後の聖カスバート Saint Cuthbert, 630-687) が、修道院長就いた。カスバートの死後、793年から、ノース人のヴァイキングによる襲撃が激しくなり、875年に、修道僧たちが聖カスバートの遺骸を守るために、リンディスファーンを離れ、995年に、ダラム (Durham) 地に遣って来たのであった。その結果、ダラムは、キリスト教徒にとって、重要な地になり、軍事的に強化されたのであった。聖カスバートの遺骸は、その後、小高い山の上に建造されたダラム大聖堂 (Durham Cathedral) に埋葬された。

・なお、聖カスバートの遺骸は、ダラム大聖堂内の東側の端、大祭壇の後方に安置してある。また、ダラム大聖堂の南、坂を下ったクレイポート図書館 (Clayport Library) の前の広場に、修道僧たちが、その後建造された大聖堂に向かって、聖カスバートの遺骸を運んでいるモニュメントがある。

・ A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland: The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 68 and p. 97.

・ Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 33 and p. 71.

エゼルレッド2世にとって、エンマとの結婚は、第2回目の結婚であった⁷¹⁾。

また、このエンマとの結婚によって、イングランド王エゼルレッド2世は、フランス王国のノルマンディー公国と軍事協同、軍事支援を受けることができるようになった。

アルバ王国では、ケネス3世が、ケネス2世の長男マルカム (Malcolm) とのモンジーベアードの戦い (the Battle of Monzievaird) において、1005年に、殺害された。

このケネス2世の長男マルカムが、アルバ王位を継承し、マルカム2世 (Malcolm II, c. 954-1034.11.25 : 在位 c. 1005-1034) になった⁷²⁾。

IV. 領土拡大

アルバ王としての長期継続を願うケネス3世派と、早期アルバ王を願うケネス2世の長男マルカム派との間に内乱、すなわち、王存命中の親族による族長後継者選定のタニストリー=システムにおいて、1005年に、フェアーン川 (the River Fearn) 近くのモンジーベアード (Monzievaird) で、内乱が起こった⁷³⁾。

このモンジーベアードの戦いで、1番近い従兄弟のケネス2世の長男マルカム派が、軍事力により、ケネス3世と彼の長男ギリック (Giric, ? -1005) を殺害した。

この結果、1005年3月25日に、ケネス2世の長男マルカムが、アルバ王国のスクーン宮殿に設置してある聖なる石・ストーン=オヴ=スクーンの上に座り⁷⁴⁾、戴冠式を終え、アルバ王マルカム2世になった。

アルバ王に就いたマルカム2世のアジェンダ (Agenda : 政策課題) は、当然、自身の権力強化と自国の領土拡大であった。

71) Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 379.

72) A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland : The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 97.

73) A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland : The Making of the Kingdom, *ibid.*, p. 97.

この権力強化は、マルカム2世の直系の王位継承を、存続させるために必要不可欠であった。

領土拡大は、自国の経済安定を齎すうえで、必要不可欠であった。

そこで、マルカム2世の喫緊のアジェンダは、この権力強化を実現させるために、自身の王権維持に対して、障害となる人物を、積極的にすべて武力によって排除するということであった。

この排除が残酷すぎたので、後世の人により、マルカム2世に、ザ=デストロイヤー (The Destroyer：破壊王) というあだ名が付けられた。

マルカム2世は、タニストリー=システムを否定する立場上、どうしても、直系の男子相続者が欲しかったが、恵まれなかった。

子供は、2人の娘、長女ベソック (Bethoc, 984-1045)、2女ドウナダ (Donada,

74)・スコット族の王が、歴代戴冠式に用いた聖なる大理石 (Mable) の石を、500年頃、ファergus=モウ=マックエルクが、ヒベルニア (HIBERNIA：現アイルランド) から、カレドニアのキンタイア半島に持ち込んだ。そして、この聖なる石は、ヴァイキングの略奪から逃れるために、最終的にアルバ王のケニス1世=マッカルピンにより、838年に、スクーン宮殿に持ち込まれた。この聖なる石・ストーン=オヴ=スクーンは、1005年3月25日、アルバ王マルカム2世の戴冠式にも使用された。この聖なる石・ストーン=オヴ=スクーンは、その後、対イングランドとの戦いにおいて敗戦し、1296年、イングランド王エドワード1世 (Edward I, 1239.6.17-1307.7.7：在位1272-1307) により、戦利品として奪われ、ウェストミンスターアベイ (Westminster Abbey) の戴冠式用の玉座の中にはめ込まれた。さらにその後、1950年に、スコットランド人の愛国者4人によって、スコットランドに持ち込まれたが、再度、イングランドに戻され、玉座の中にはめ込まれた。さらにその後、この聖なる石・ストーン=オヴ=スクーンは、トニー=ブレア (Tony Blair：Anthony Charles Lynton Blair, 1953.5.6：在位1997.5.2-2007.6.27) 首相時、1996年11月15日に、スコットランドに返還された。そして現在、エディンバラ城、ロイヤル=パレス (the Royal Palace) の中の分厚い金庫の中、クラウン=ルーム (the Crown Room) の中に、オナーズ=オヴ=スコットランド (The Honours of Scotland) と共に、保管されている。

- ・このクラウン=ルームの中にある聖なる石・ストーン=オヴ=スクーンのサイズは、研究者の結果により、横67cm、縦42cm、高さ26.5cm、重さ152kgで、ピンクかかった淡黄褐色の砂岩 (pinkish-buff sandstone) である (David Breeze and Graeme Munro, *The stone of Destiny, op. cit.*, p. 42.)。
- ・この聖なる石・ストーン=オヴ=スクーンは、上述のように数奇な経緯を辿ったとして運命の石 (The Stone of Destiny) とも言われている。ヒルベニアからカレドニア、すなわちスコットランドに持ち込まれた石が、大理石であって、現クラウン=ルームにある石がピンクかかった淡黄褐色の砂岩であり、違うのではないかという疑問もあるが、現在の聖なる石・ストーン=オヴ=スクーンが、公的に、聖なる石・ストーン=オヴ=スクーンなのである。

c. 985-1034.11.25) であった⁷⁵⁾。

当然、マルカム2世は、2人の娘への王位継承権に対して、障害となる人物、多少でも危機感を与える人物を、すべて排除しなければならなかった。

親戚の中から危険人物を排除するという事は、身内ないで確執が生まれ⁷⁶⁾、内乱が起き、アルバ王国の国力が低下するということを意味している。

そこで、マルカム2世は、危険人物を積極的に排除するよりも、経済的に豊かで、強権を有している人物を、自身の味方、下臣に付ける方が、得策であるということを学習した。

学習の結果は、2人の娘による政略結婚であった。

言い換えると、マルカム2世は、この2人の娘を通じて、王権の強化、すなわちアルバ王国内の安定化を図ろうとしたのである。

具体的には、長女のベソックを、1000年頃、アサル大領主 (head of the house of Atholl) で、ダンケルド修道院長であるクリナン (Crinan, Abbot of Dunkeld, c. 976-1045) へ嫁がせ、両者の間に生まれた長男ダンカン (Duncan: 後のダンカン1世 Duncan I, 1001-1040.8.14 : 在位 1034-1040) を、王位継承者とさせることであった⁷⁷⁾。

また、マルカム2世は、2女のドウナダを、1005年頃、モレー大領主のフィンレック (Findlaech : Finlay, Mormaer of Moray : 在位 c. 990-1020) へ嫁がせた。そして、両者の間にアルバ王となるマクベス (Macbeth, 1005-1057.8.15 : 在位 1040-1057) が生まれた⁷⁸⁾。

次に、領土拡大に関して、マルカム2世は、971年頃に、父ケネス2世がイ

75) Josephine Ross, *Kings & Queens of Britain*, Reprinted of 1982, edition, Artus Books, 1994, p. 188.

76) A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland : The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 99.

77) Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 53.
・ A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland : The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 99.

78) Josephine Ross, *Kings & Queens of Britain*, *op. cit.*, p. 188.

・ A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland : The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 99.

2017年6月 川瀬 進：マルカム2世によるスコットランド王国の領土拡大

ングランドのエドガー1世より、譲渡していただいた国境の領土、ロシアンの領土を⁷⁹⁾、完全に制圧することであった。

というのは、デンマーク王スヴェン1世（Sweyn I:Swegen I, “Forkbeard: 八の字ひげ王”, King of Denmark, 960-1014.2.3 : デンマーク王在位985-1014 : ノルウェー王在位985-995, 1000-1014 : イングランド王在位1013-1014) 率いるデイン人が、1003年に、イングランド王国のノーサンブリア、およびロシアンに侵攻、略奪してきたからである。

このスヴェン1世の侵攻、略奪理由は、イングランド王エゼルレッド2世が、王国内に居住しているデイン人の子孫たちを、1002年11月13日（セント＝ブライスの日：St. Brices Day）に虐殺した⁸⁰⁾、ことに対する復讐であった。

では、なぜエゼルレッド2世は、軍事的に優位に立っているデンマーク王スヴェン1世の下臣たちの子孫を、虐殺したのであろうか。

その理由は、2つある。

第1の理由は、エゼルレッド2世が、略奪のためイングランド東岸に押し寄せてくるデイン人に対し、王国内の平和を維持するために、従来通り、ガフォール（gafol : 後のデインゲルドDanegeld : デイン人への退去料）を支払い、貢物を渡していたのであるが、一向にデイン人の来襲、略奪が収まらず、また、次第にデインゲルドの支払いのため王室財政が逼迫し、下臣、人民から、強く反発を受けるようになったからである。

第2の理由は、エゼルレッド2世が、1002年に、ノルマンディー公リシャール1世の娘エンマ＝オヴ＝ノルマンディーと結婚したことにより、イングランド軍の背後にノルマンディー軍が控えるようになり、軍事的に勝てると判断したからである⁸¹⁾。

なお、この1003年の復讐は、デンマーク王スヴェン1世八の字ひげ王による第1回目のイングランド侵攻、略奪である。

79) David Ross, *Scotland History of Nation*, New Edition, *op. cit.*, p. 54.

80) Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 380.

・ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 387.

81) Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 380.

なお、このデンマーク王スヴェン1世による第1回目のイングランド侵攻は、イングランドが大飢饉 (the great amine) 状況に見舞われたため、1005年に終了し、デンマークに戻った⁸²⁾。

だがすぐに、翌年の1006年に、異教徒のデンマーク王スヴェン1世八の字ひげ王は、イングランドを襲撃、略奪しに戻って来た。

いわゆる、デンマーク王スヴェン1世八の字ひげ王による第2回目のイングランド侵攻、略奪である。

スヴェン1世率いるデイン人軍がイングランド南部を襲撃、略奪している1006年に、アルバ王マルカム2世は、領土拡大のため南下、ノーサンブリア北部、バーニシアに侵攻し、キリスト教徒の聖地となっていたダラム市を包囲した⁸³⁾。

このダラム市の包囲に対して、イングランド王エゼルレッド2世は、ノーザンプリアに援軍を送ることができなかった。

というのは、イングランド南東部ケント州 (Kent)、サンドウィッチ (Sandwich) に、デイン大艦隊が大挙して遣って来ていて、それに対処していたからである。

そこで、ノーザンプリア伯領ウットレッド (Uhtred the Bold, 1016) は、自身の軍隊に、徴募したバーニシアや、ヨークシャーの軍隊を加え、アルバ軍と戦い、結果的に勝利を得た⁸⁴⁾。

この勝利により、ノーザンプリア伯領ウットレッドは、アルバとのボーダー地方、バーニシアに権勢を拡大させていった。

一方、ケント州でのエゼルレッド2世は、1007年、デイン人に、30,000ポンドのガフォール (gafol: 後のデインゲルド Danegeld: デイン人への退去料)

82) · Translated and edited by M. J. Swanton, *The Anglo-Saxon Chronicle*, J. M. Dent, 1996, p. 136.

· Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 381.

83) A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland: The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 97.

84) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 407.

2017年6月 川瀬 進：マルカム2世によるスコットランド王国の領土拡大

の支払いと、貢物を渡し、その地から去ってもらった⁸⁵⁾。

そして、イングランド王エゼルレッド2世は、デイン人に対処するために、言い換えると自国の軍事を再強化するために、すなわち指揮命令系統をより確立させるために、下臣であり、忠誠心に熱く、1006年にヨーク伯エルフヘレム(Ælfhelm of York, ? - d. 1006)を殺害したエドリック=ストレオナ(Eadric Streona, Earl of Mercia, c. 992-1017.12.25)を、1007年に、マーシア伯に任命し、自身の娘エディス(Edith: Eadgyth Eadric)と結婚させた。

その軍事再強化として、エゼルレッド2世は、1008年に、イングランド全土の領主に対して、ハイド(hide: 領有している地積)あたりに換算して、軍艦、軽快走船、鉄兜、鎖帷子を準備させた⁸⁶⁾。

アルバ王国の領土拡大で、南部地域での成果が上げられない一方、さらに北部では、不穏な動きが現れてきていた。

その不穏な動きとは、当然、ヴァイキングのノース人による侵攻であった。

具体的には、北部モレーの1部を支配していたノルウェー王国領のオークニー伯シーガードが、勢力を拡大し始めていたのである。

そのことを阻止させるために、マルカム2世は、1008年に、軍隊をモレーのフォレス(Forres)に向かわせた。そして、フォレスの戦い(the Battle of Forres)となった。

結果は、オークニー伯のシーガード軍が勝利した。

そこで、マルカム2世は、北部の安定化を図るために、同年1008年に、自身の2女のドウナダを、オークニー伯のシーガードのもとに、再婚させた⁸⁷⁾。

85) Translated and edited by M. J. Swanton, *The Anglo-Saxon Chronicle*, *op. cit.*, p. 138.

86) Translated and edited by M. J. Swanton, *The Anglo-Saxon Chronicle*, *ibid*, p. 138.

87) この2女のドウナダの再婚という理由は、史料1(*The Hutchison Illustrated Encyclopedia of British History*, Reprinted of 1995, edition, Helicon, 1996, p. 9.)と史料2(Josephine Ross, *Kings & Queens of Britain*, Reprinted of 1982, edition, Artus Books, 1994, p. 188.)の家系図から判断した。特に史料1のマルカム2世の子供のうち、第3番目のDaughterのところを、2女のドウナダに置きいれると、理論的に納得できるからである。

・ A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, Scotland: The Making of the Kingdom, *op. cit.*, p. 99 and p. 100.

・ Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 52.

この再婚を、オークニー伯シーガード側から言うと、略奪婚であった。

というのは、オークニー伯シーガードにとっても、なるべく争いごとをさせ、領土を拡大させたかったからである。

このドナウダとシーガードとの間に、ソーフィン (Thorfinn the Mighty, c. 1010-1065) が生まれた。

オークニー伯のシーガードは、ドウナダとの結婚後、オークニー諸島、およびアルバ王国の北部を、平穏無事に順調に統治していた。

なお、1010年以降、マルカム2世は、軍事強化によって、アバディンシャーのモートラック (Mortlach) で、ヴァイキングを撃破することができた。

その一方、隣国のイングランドでは、1009年に、デンマーク王スヴェン1世八の字ひげ王により、イースト=アングリア (East Anglia) が襲撃を受けていた。いわゆる、スヴェン1世による第3回目のイングランド侵攻、略奪である。

また、この侵攻、略奪に対し、イングランド王エゼルレッド2世は、デンマーク王スヴェン1世、およびデイン人に対して報復を考えだした。

イングランドへの侵攻、略奪の結果、イングランドは、1013年に、占領、支配され、デンマーク王スヴェン1世八の字ひげ王がイングランド王に就いた。

よって、エゼルレッド2世は、妻と共に、妻の故郷ノルマンディーへの亡命を、1013年、余儀なくさせられた⁸⁸⁾。

スヴェン1世八の字ひげ王が、1014年2月3日、リンカンシャーのゲインズバラ (Gainsborough) で、急死したことにより、エゼルレッド2世が、イングランドに帰国し、復位した。

スヴェン1世八の字ひげ王の死により、デンマーク王国内では、王国が息子の兄ハーラル(後のハーラル2世 Harald II: デンマーク王在位 1014-1018) と、弟クヌート (後のクヌート1世 Cnut : Canute : Knut I, 995-1035.11.12 : イングランド王在位 1016-1035 : デンマーク王在位 1018-1035 : ノルウェー王在位

88) · Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 392.

· Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 386.

2017年6月 川瀬 進：マルカム2世によるスコットランド王国の領土拡大

1028-1035) とに分割された。

この分割を、早急に弟クヌートが再統合し、イングランド王位を狙うようになった。

なお、アイルランドでは、1014年、クロンタールの戦い (the Battle of Clontarf) で、アイルランドの上王ブライアン=ボルルー (Brian Boru, c. 941-1014.4.23 :在位1002-1014) が殺害されることによって、アイルランドでのノース人による支配が終焉した。

イングランドを征服するために、1015年夏、クヌートがイングランドに上陸してきた。

これに対抗するため、すなわちデイン人のヴァイキングを排除するために、オックスフォードで大会議 (Great Council) が開かれた。

その大会議で、エゼルレッド2世の義理の息子マーシア伯エドリック=ストレオナが、七城市の最も影響力のある有力者2人、シエヴェルス (Sigeferth: Siferth) とモルカル (Morcar) を殺害した⁸⁹⁾。

このマーシア伯エドリック=ストレオナの行為は、イングランド王エゼルレッドを裏切り、デイン人のクヌート側に寝返ったということである。

このことにより、エゼルレッド2世のデイン人報復は、義理の息子マーシア伯エドリック=ストレオナの裏切りにより、失敗に終わった⁹⁰⁾。

なお、エゼルレッド2世は、デイン人と戦っている最中、1016年4月23日に、ロンドンで病死した。

このエゼルレッド2世に対して、後世の経済史家たちは、何らイングランドに利益を齎さなかったとして、彼のニックネームを、アンレディ (Unready) : リッドレス (Redeless)、すなわち無思慮王、無計画王と名付け

89) ・Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 394.

・Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 388.

90) マーシア伯エドリック=ストレオナは、スヴェン1世の息子で、イングランド王に就いて2年目のクヌート1世 (Cnut : Canute : Knut I, 995-1035.11.12 : イングランド王在位1016-1035 : デンマーク王在位1018-1035 : ノルウェー王在位1028-1035) によって、1017年12月25日に殺害された。

たことは、当然のごとく納得できる⁹¹⁾。

イングランドに上陸していたデイン人のクヌートは、エゼルレッド2世からイングランド王位を引き継いでいたエドモンド2世=アイアンサイド(Edmund II, 'Ironside (剛勇王)', c. 988-1016.11.30 : イングランド王在位 1016.4.23-1016.11.30) と交戦せざるを得なくなった。

この戦いは、エセックスの南東で起こった1016年10月18日のアシンドンの戦い(The Battle of Ashingdon : アッサンダンの戦い the Battle of Assandune) である⁹²⁾。

このアシンドンの戦い(アッサンダンの戦い)の結果は、戦いの最初にマーシア伯エドリック=ストレオナが逃げたという背信行為により、クヌートが領有することになった⁹³⁾。

エドモンド2世が、1016年11月30日に亡くなると、生前の約束通り、テムズ川以北を、クヌートが領有することになった。

そして、クヌートは、イングランド王位に就き、クヌート1世(Canute I, king of Denmark, 995-1035.11.12 : イングランド王在位 1016-1035 : デンマーク王在位(クヌーズ2世) 1018-1035 : ノルウェー王在位 1028-1035) となった。

このクヌート1世治世時に、ノーサンブリア北部、アルバ王国とのボーダー地方、ロシアンを含む旧バーニシア王国の首都であり、半独立を保っていたバンボロー(Bamburgh)では、イングランド軍がデイン人討伐のため南下し、手薄になっていた。

このイングランド軍の手薄をつき、アルバ王のマルカム2世は、1018年に、自身の領土拡大という野心のため、資源豊かなロシアン(Lothian)に侵攻した。

この侵攻がアルバ王国とイングランド王国との不安定なボーダー地域での緊張をさらに高め、紛争が勃発した。

91) Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 395.

・ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 398.

92) Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 392, and p. 392, n. 2.

・ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 397.

93) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 397.

いわゆる、アルバ王国南部とノーザンブリア北部のコールドストリーム (Coldstream) 地方、ツイード川 (the River Tweed) 南部のカーハム (Carham) の地、ウォーク (Wark) とコーンヒル (Cornhill) の間で始まった1018年のカーハムの戦い (The Battle of Carham) である⁹⁴⁾。

具体的には、アルバ王国マルカム2世+同盟国ストラスクライド王国オーウェン (Owen the Bald, King of Strathclyde, d. 1018) vs. イングランド王国クヌート1世+ノーザンブリア伯領ウットレッド (Uhtred the Bold, Earl of Northumbria, 1016) である。

マルカム2世にとって、このノーザンブリア伯領ウットレッドは、1006年のダラム市の包囲時、敗北を喫させられた人物であった⁹⁵⁾。

だが、結果は、1016年の戦いの当初、ノーザンブリア伯領ウットレッドが、ノーザンブリアの有力者サーブランド (Thurbrand the Hold, d. c. 1024) によって、暗殺されたことにより⁹⁶⁾、1018年のカーハムの戦いは、ノーザンブリア軍の敗北であった。

結果は、アルバ王国マルカム2世が、イングランド王国に勝利し、ツイード川北部のイングランド領ロシアン (Lothian) を、手に入れることができたのである⁹⁷⁾。

この1018年のカーハムの戦いにより、アルバ王国は、イングランド王国との国境を画定させたのである。

このアルバ王国は、当然、スコットランド王国のことであり、現スコットランドのことである。

94) ・ James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History Story of a Nation, op. cit.*, p. 75.

・ David Ross, *Scotland History of Nation, New Edition, op. cit.*, p. 54.

・ Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 408.

・ Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 418.

・ James Mackay, General Editor, *Pocket Scotland History Story of a Nation, op. cit.*, p. 87.

・ Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol.1, *op. cit.*, p. 52.

・ A. A. M. Duncan, *The Edinburgh History of Scotland*, Vol. 1, *Scotland: The Making of the Kingdom, op. cit.*, p. 98.

95) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, pp. 407-408.

96) Frank M. Stenton, *The Oxford History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 509.

97) Thomas Hodgkin, *The Political History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 409.

V. おわりに

マルカム2世は、アルバ王ケネス3世を、1005年のモンジーベアードの戦い (the Battle of Monzievaird) で、殺害することによって、アルバ王国を継承した。

アルバ王国を継承したマルカム2世は、国王の責務として、アルバ王国の治安・経済を安定させなければならなかった。

そのためには、アルバ王国のマルカム2世自身の権力強化と、自国領土の拡大とが必要不可欠であった。

アルバ王国のマルカム2世は、自身の権力強化のため、娘たちを政略結婚させ、治安を強化させ、軍事力を維持することにより、押し寄せてきたノース人のヴァイキングに対処できた。

また、領土拡大に関しては、隣国のイングランドが強国であるがゆえに、多難であった。

だが、アルバ王国のマルカム2世は、自身の野心のもと、イングランド王国と戦うという決断を下し、ツイード川のカーハムの地において、ボーダー地方での戦いに挑んだ。

この戦いが、1018年のカーハムの戦いであった。

軍事的には、到底、アルバ王国が勝てる相手ではなかった。

だが、イングランド王国においては、当時、絶え間ないデイン人の侵攻・略奪により、混沌としていた。

このことが、アルバ王国マルカム2世に幸いし、資源豊かなツイード川北部のイングランド王国領ロシアン (Lothian) を、手に入れることができたのである。

すなわち、このロシアンを吸収することにより、アルバ王国のマルカム2世は、領土を拡大させることができたのである。

また、このアルバ王国のロシアン吸収により、アルバ王国とイングランド王国との国境、現スコットランドとイングランドとのボーダー地方の境界線が画定されたのである。